

Title	ロドルフス・グラベル再考 (1) : その形成期について
Sub Title	Raoul Graber reconsidered : on his formative years
Author	神崎, 忠昭(Kanzaki, Tadaaki)
Publisher	慶應義塾大学言語文化研究所
Publication year	2025
Jtitle	慶應義塾大学言語文化研究所紀要 (Reports of the Keio Institute of Cultural and Linguistic Studies). No.56 (2025. 3) ,p.243- 255
JaLC DOI	10.14991/005.00000056-0243
Abstract	
Notes	研究ノート
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00069467-00000056-0243

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ロドルフス・グラベル再考 (1) : その形成期について

神 崎 忠 昭

ロドルフス・グラベル (Rodulfus Glaber; 以下ロドルフス) の『歴史五書 *Quinque libri Histriarum* (以下歴史)』¹は10世紀末から11世紀初頭にかけてのロタリングア、すなわちかつてロタール2世 (在位855-869) 治下にあった現在のベネルクスからブルゴーニュの状況についての数少ない同時代史料とされてこの時代を叙述するために常に取り上げられるが、一方でミシュレ (1798-1874) を始めとして多くの歴史家から「放浪修道士」「無知蒙昧」「迷信的」「信頼できない記録者」など多くの否定的な見解が呈されてきた。だが近年ロドルフスにも関わる多くの優れた研究、たとえば地域政治史研究とそれに関連する史料刊行、王朝交代期の研究、クリュニー研究、さらに日本では三佐川亮宏氏による一連の研究や同時代史料の邦訳などがなされ、新たな光が投げかけられている。

これまで筆者はロドルフスとその著作についていくつかの小論を著してきたが²、それらの研究を踏まえると拙稿の考察はまったく十分でないと考えているにいたった。本稿は推測に推測を重ねており忸怩たる思いもあるが、ロドルフスの形成期について改めて検討することを目的とする。

1) 奉献／誓願

ロドルフスは『歴史』や『グリエルムス伝 *Vita domni Willelmi abbatis*』の記事に自らの個人情報をかなり織り交ぜてはいるが、生年は明らかにしてお

『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』第56号 (2025) pp.243~255

らず、また彼の生涯に触れた他の史料も現存しない。それゆえ先行研究も状況証拠から憶測するにとどまっており、現代語訳に付せられた解説に限っても、ロドルフスの生年を、英語版は980年頃、イタリア語版は985年頃、フランス語版は10世紀末とするに過ぎない³。

ただロドルフスは自らが修道士になった年齢は記している。「このように告白することを私は（恥ずかしく思って）赤面することはないが、自分はその両親たちの罪のうちに（*in peccatis parentum meorum*）生まれただけでなく、振る舞いにおいて度し難く、行いにて赦し難く、言葉にできないほどであった。ある修道士（これはわが叔父だが）に強いられて、それまで他の何にもまして追い求めていた世俗の生のきわめて逸脱した虚栄（*a peruersissima secularis uite uanitate*）から引き離され、12歳になったばかりのときに修道士の服を着せられた（*monachili inductus habitu*）。ああ、何と悔やむべきことであらうか（*pro dolor*）、だがそれは衣服においてだけであって心では何も変わっていなかったのだ」（*Historiae*, V, 3 : pp.218-220）⁴と述べている。「多くの罪のうちに生まれた」とあることから庶子とする説もあるが、単に「人はすべて原罪を免れられない」という中世的な考え方の反映であるかもしれない。いずれにしても自分の回心によってではなく、奉獻修道士（*oblatus*）として強いて修道院に入れられたのである。

ここで注意しなければならないのは「12歳」という比較的高い年齢である。11世紀に奉獻の習慣が廃れるまで、多くのベネディクト修道士は幼児の頃、すなわち12歳よりかなり前に修道院に入れられていた⁵。「ベネディクトゥス戒律」は、富貴の家柄の場合、財産を添えて「子ども *puer*」を捧げることを認めており⁶、奉獻は決して戒律を逸脱した行為ではなかった。まったくの幼児が捧げられることも多く、幼稚園のような院内の施設で担当の修道士に世話をされることもあったという。実際、ロドルフスの師であったヴォルピアーノのグリエルムス（962頃-1031）は「7歳になろうとする頃」に修道院に送られ、院長は「十分な愛情をもって彼を受け入れて、また聖なる修道生活の服を着せた（*satis deuote illum suscipiens, sacre monachilis religionis etiam veste induit*）。そして彼に学問の最初の手ほどきをし、このことの世話

をする教師を置いた」(Vita, ii : pp.257-258) ののである。

このギャップの意味を理解するには、奉獻修道士となる過程を考えなければならぬだろう。当時、奉獻修道士として受け入れられるには奉獻 (oblatio) と誓願 (professio) という2つのステップを経なければならなかった。ほとんどの場合、修道院に入ることは父親などの親族によって決定され、その際には修道院に対して寄進 (donatio) がなされた。奉獻は理屈の上では取り消すことができたが、親族が決定し寄進財産にも関わる案件ゆえに実際には解除はきわめて困難であったという。そして最終的に修道士となるのは、2つ目のステップである誓願によってであり、誓願は、本人に分別／意志が備わっていることが大前提であったので、「子ども」ではなくなる12歳ないし15歳の時になされるのが通常であった⁷。ロドルフスが「12歳で「修道士の服を着せられた」というのは、奉獻よりも誓願を立てさせられたという意味であろう。この誓願は「自らの意志」によるゆえに撤回することができなかった。

本人の思いとは無関係に自由を奪われた者たちの怒りや悲しみは深かった。たとえば「予定説」を強く唱えたオルベのゴットシャルク (868年没) のように上長であるラバヌス・マウルス (780頃-856) らとの対立から最終的に独房で人生を終えたり、あるいは寄進財産をめぐる訴訟を起こす者が現れたりするなど不満は高く、奉獻修道士とされた者の嘆きは珍しくなかった。たとえば、ロッベス修道院長フォルクイヌス (Folcwinus : 990頃没) はカール・マルテルの血を受け継ぎ、サン・ベルタン修道院長やロッベス修道院長を兼任した人物であるが、彼でさえも「私は聖ベルティヌスに奉獻された。修道士に、何と悔やむべきことであろうか、表面だけが、させられたのである (sancto Bertino oblatus, monachum, pro dolor! facie tenus, sum effectus)」と慨嘆している⁸。中世の聖職者の著作に常に見られる自己卑下も加わっているが、ロドルフスは決して特殊な不満分子だったわけではない。

一方で、現代の初等教育におけるように、当時も6～7歳の頃には将来の進路に関わる教育が始められていた。12歳で「修道士の服を着せられた」ということは、すでにロドルフスも何らかのキャリアに着くべく教育を受けて

いたと考えられる。修道士として養成されていたのかもしれないが、「世俗の生のきわめて顛倒した虚栄」という表現を考慮すると、「小姓puer」として俗人有力者の居館で奉仕し、あるいは同世代の者たちとともに在俗聖職者として司教座などで教育を受けた可能性も否定できないであろう。ロドルフスが『歴史』第3冊において、トゥールのサン・マルタン教会の宝庫係ヘリヴェルス(Heriverus:1022没)が「もっとも生まれのよい人々の常であったように、貴族として(nobilitate)教育され、そののち自由学芸の諸学校(scolis artium liberalium)に送られた」(Historiae, III, iv, 14: pp.116-117)と記しているようにである。

2) 最初の修道院

しばしばロドルフスは「放浪修道士」と断罪されるが、『歴史』の中で滞在したと言及されているのは、サン・ジェルマン・ドセール修道院(Saint-Germain d'Auxerre)、サン・ジャン・ド・レオム修道院(Moutiers-Saint-Jean de Réôme)、サン・レジェ・ド・シャンポー修道院(Saint-Leger de Champeaux)、サン・ベニーニュ・ド・ディジョン修道院(Saint-Bénigne de Dijon)、クリュニー修道院(Cluny)、サン・ピエール・ド・ベーズ修道院(Saint-Pierre de Bèze)、サント・マリ修道院(Moutiers-Sainte-Marie)の7修道院に過ぎない。

それらのうち、ロドルフスが最初に入った修道院として有力なのは、「奉獻された」と述べている直前の個所(Historiae, V, 2: pp.218-219)で名前が挙げられているサン・レジェ・ド・シャンポー修道院と、彼が最晩年を過ごしたサン・ジェルマン・ドセール修道院である。

サン・レジェ・ド・シャンポー修道院について、関連する証書類は伝わっていないが、1969-1977年になされた調査は、残された言及や発掘資料から破壊以前の姿を推測している⁹。伝承によれば、この修道院はカール大帝の娘のひとりテオドレード(785頃-844/53)によって800年から820年の間に創建ないし再建されたが、10世紀後半には衰退していたという。もう一つの候補であるサン・ジェルマン・ドセール修道院¹⁰は、5世紀中葉にオセール初代司教であるゲルマニウス(380頃-448)によって創建されたもので、クロー

ヴィスの妃でブルクント王家出身のクロティルド（474頃-545頃）や在地司教たちの庇護を受けて繁栄したが、カール・マルテル（688頃-741）によって財産を没収されて王権に従属した。カール大帝の時に繁栄を取り戻し、さらに時代を下ってシャルル2世（西フランク王在位843-77）は好んで滞在し、自ら俗人院長を務め寄進を重ねたという。その後はシャルル2世の母の出身家門である古ヴェルフ家と何代にもわたる関係を築いて多くの所領を有したが、俗人修道院長の就任が続き、やはりカロリング朝末期の混乱の中で『サン・ジェルマン・ドセール修道院長事績録』が絶えるほど衰微した¹¹。

989年ブルゴーニュ公アンリ1世（在位965-1002）はオセール司教ヘリベルトゥス（在任971-996）と諮って、クリュニー院長マイオルス（906頃-994）に再建を打診し、彼の弟子ヘルドリクスが派遣されてサン・ジェルマン・ドセール修道院長（在任989-1010）に就任した。修道院は復興し、多くの所領や小教区が回復あるいは寄進された。一方で、サン・レジェ・ド・シャンポー修道院の再建もヘルドリクスに委ねられ、990-94年頃にカロリング期の修道院に代わって第二期の建物が新たに建てられた可能性が指摘されている。また寄進にあたり、サン・ジェルマン・ドセール修道院はサン・レジェ・ド・シャンポー修道院に8名の修道士を派遣して常駐させる条件が課せられた。これら二つの修道院は当初は一人の修道院長を一緒にいただく別個の共同体だったが、『事績録』によれば、ブルゴーニュ公アンリ（在位965-1002）とヌヴェール伯ランドリ（在位989-1028）の同意を得て、一つの共同体に統合された¹²。若い頃のロドルフスが派遣されたとしてもおかしくはなく、彼はサン・ジェルマン・ドセール修道院に帰属していたと考えるべきであろう。

そして『歴史』の中でこれらの修道院の上長として名が挙がっているのは院長ヘルドリクス（*Historiae*, II, viii, 15 : pp.78-79）と次長（prior）でのちに院長となるアカルドゥス（Achardus : 在任1010-20頃 ; *Historiae*, II, ix, 20 : pp.86-87）だけである。ロドルフスはヘルドリクスが院長を務めていたときに修道士となったのであろう。それゆえ、もっとも年長と考えるならば、ヘルドリクスが就任した989年に12歳で修道誓願を立てたことになり、上限で

977年頃に生まれたという計算になる。

3) 教育

かつてロドルフスは「無知蒙昧」とされてきたが、彼の著作を注意深く読むと、かなり高い学識を積んだ人物であることがわかる。たとえば、「よくわからぬ戯言」と見なされてきた冒頭の「世界の四重性 *De Divina Quaritate*」はアンブロシウス（340頃-397）の『楽園について *De Paradiso*』や、ギリシア教父証聖者マクシモス（580頃-662）の著作をフランク王国の神学者ヨハネス・エリウゲナ（810頃-877頃）が翻訳した『難問 *Ambigua*』に拠っていることが指摘されている¹³。稿を改めて論じるように、『歴史』は単なる事実の記述ではなく混乱の中に神の秩序を見出そうとする、むしろ神学的な願望を含む試みなのである。

また『歴史』にはギリシア語由来の語や自然学についての言及もある。たとえば「アルマンソン川沿いのシャトー・サン・フロランタンに、ある日の正午頃、天から、ギリシア語でselasあるいはcasmaあるいはpalmecieと呼ばれるものが降り、輝くエーテルの光輝が普段にないようなかたちで大地に送られた。愚かしいことに、庶民は天から星が落ちてきたと主張した」（*Historiae*, V, i, 18 : pp.240-243. 傍点は筆者による）。このselasは「σέλας（彗星）」、casmaは「φάσμα（雷光）」、palmecieは「palmatias/παλματίας（軽い地震）」を指し、隕石落下にともなう一連の現象を指すという¹⁴。この隕石の記述をJohn Franceはイシドルスの『事物の本性について *De Natura rerum*』によるとするが¹⁵、たとえばヨハネス・エリウゲナの著作にも夜間の聖務のあとに「エーテルの領域から落ちてきた輝き chasma」に驚くさまが記述されている¹⁶。修道士たちは天上の異変に注意しつづけていたのである。

さらに『歴史』では3回の蝕が記録されているが、第四書では「同じ年の主の受難から千年目の6月29日、第7の週日（金曜日 *sexta feria*）、月相は第28（*luna uicesima octaua*）に、ひじょうに恐るべき太陽の蝕がその日の6時から8時まで起こった。太陽自体がサファイア色になり、（太陽の）上方の部分で（新月から）再び輝き始めて4日目の月のようなかたちをとった

(*gerens in superiori parte speciem lune a sua reilluminatione quarte*)。人々が互いに他の人々を見ると、まるで死者のように青ざめて見え、あらゆるものがクロッカス（の花）の色のよう（紫の）霧の下にあるように見えた。そのとき人類の心を巨大な驚きと恐怖が襲った。これを見た人々は、人類に悲しい災厄が起こるであろうことを予表していると理解したからである」(*Historiae*, IV, ix, 24 : pp.210-211) と描いている。

一方、『歴史』第五書では「11月9日、月相は第14 (*luna quarta decima*)、エパクトはなかったが、第七（天秤宮）に合があつて (*nulla currente epacta, concurrente septimo*) 月蝕が起こり、人々を恐怖させた。夜の8時に太陽と月そのものの間に、神によって成し遂げられたこと (*patratum a Deo*) が顕示された。他の天体の天球 (*spera*) が間に入ったのかもしれないが、何が本当に起こったかは創造主にしか分からない。またその月は最初ほぼ全面がぞっとさせる血（の色）のようになり、その後徐々に消え、翌日の明け方には見えなくなった」(*Historiae*, V, i, 18 : pp.240-241) とする。

『歴史』第五書では「また前述の11月の22日、その日の3時、われわれの時代で3回目の蝕がなされたが、(今回は) 太陽のものであった。月相は第28 (*luna uicesima octaua*) であったが、日蝕は常に月相の第28に、月蝕は月相の第14にしか生じないからである。(ギリシア語由来の) 蝕 (*eclipsis*) は「欠けた*defectus*」あるいは「減じる*defectio*」という意味だが、(太陽あるいは月という) 事物それ自体 (が欠けるの) ではなく、(何かによって) われわれには隠されて減じるのである。この頃、ランス大司教ギー (Wido : 在位1033-55) が語るには、彼の教区民たちに対して、ボスフォルス (*Bosforus*)¹⁷ 星 (これは明けの明星 (金星 : *Lucifer*) である) が、夕方に上下に動き、まるで「地に生まれた者たち*terrigenas*」を慄かせながら同じように不規則な運動を続けるのが示された (*visa sit*) ことを私たちは知った」(*Historiae*, V, iii, 20 : pp.244-245) と記している。このように蝕は神によって成し遂げられ、奇跡／天啓として示され見るができるもの (*visa*) ではあったが、ロドルフスは同時に蝕が天体の関係によって生じ、月相に関わる規則性があることを理解していたのである。暦法 (*computus*) や天文学にある程度の知識を

有したと考えられよう。

教父著作から天文学にいたる多岐にわたる学識をロドルフはどこで得たのであろうか。やはりサン・ジェルマン・ドセール修道院が大きく寄与したことは確実である。後述のように修道院を去る際に、彼は「さらに彼らによって煽られて前述の地の兄弟たちは私をその住まう家から追放したが、誰かが居させてくれる場が（私に）なくなることはないであろうと分かっていた。ただ（私に）学問があるという理由ゆえにである。そして、このことはしばしば証明された」（*Historiae*, V, i, 3 : pp.220-221）と秘かな誇りをもって語るように、この頃には学識者として自立できていたのであろう。

オセールはカロリング・ルネサンス後期の中心地として知られ、オセール学派はムレタク（Murethach, 9世紀に活躍）、ハイモ（Haimo, 865頃没）、ヘイリクス（Heiricus, 841頃-76頃）、レミギウス（Remigius, 841頃-908）のような優れた学者を輩出し¹⁸、815年には600名の修道士を擁し、特に修道院学校はそれ以外に5000名の学生を教育していた¹⁹。またヘイリクスを通じてオセール学派はヨハネス・エリウゲナの影響も受けたともいう。ロドルフがのちに寄留することとなるクリュニー修道院の蔵書も、トゥールのサン・マルタン教会に属しレミギウスに学んだ第2代院長オド（878頃-942）が持ってきた書籍によって基礎づけられたとされるなど、強い親近性を有した。荒廃ののち、ブルゴーニュ継承戦争（1003年）の際に退去を求められて修道院長と修道士がサン・ジャン・ド・レオム修道院に避難した際にも、修道院内での祈りを絶やさぬようにするため8名の修道士が残った（*Historiae*, II, viii, 15; : pp.78-79）と記録されているゆえ、それなりの大所帯となっていたのであろう。ただムレタク以来のサン・ジェルマン・ドセール修道院の学統は文法、聖書釈義、聖人伝などに重点があるように筆者には思われる²⁰。天文学や暦法はどこで学んだのであろうか。

ここで注意すべきは、当時の修道院／司教座学校が孤立して活動していなかったことである。実際、ロドルフを育んだオセールは他の文化拠点、たとえばフェリエール、フリュリー、ラン、ランス、リヨン、さらにフルダなどのあいだでは学生や手稿本の密接な交流があり、専門家でさえオセール

か、それともフリユリーで作成されたか手稿本を見極めるのは難しいという。ロドルフスと同世代でも、サンスのサン・ピエール・ル・ヴィフ修道院のオドラヌス（985頃-1046頃）は、その『モノコードの分割について *De divisione monochordi*』をサン・ジェルマン・ドセールの修道士たちに献呈している²¹。多くの学識者が司教座学校や修道院のネットワークの恩恵を受けて研鑽を積み、いわば「知の共和国」を形成したのである。

ロドルフスの知的ネットワークを考えるうえで興味深い人物が、前述のトゥールのサン・マルタン教会の宝庫係ヘリヴェルスである。『歴史』の叙述は怪異や悪行に溢れているが、ヘリヴェルスの生涯は敬愛に包まれた「聖人伝」のように叙述されている。彼は「神に満たされた人 *uir Deo plenus*」「主の人 *uir Domini*」「もっとも尊ぶべき方 *uir reuerentissimus*」と称えられ、聖マルティヌスが顕現（*apparuit*）する恩恵を与えられ、「苦行によって自らを痛めつけ、教会の傍らの小さな修道房で一人、詩編と祈りに専念して暮らし」聖なる死を成就したのである（*Historiae*, III, iv, 15 : pp.118-121）。ロドルフスが「主の人」と敬うのは『歴史』では他にクリュニーのマイオルスとアイルランド修道士ブレンダン（484頃-577頃）だけである。もう一つの著作『グリエルムス伝』では師ヴォルピアーノのグリエルムスも「主の人」とされるが、『歴史』では「尊ぶべき修道院長 *uererabilis abba*」とされるに過ぎない²²。ロドルフスはヘリヴェルスと個人的な交流があり、彼への敬慕をここで表したのであろう。

このヘリヴェルスについてはロドルフス以外の史料も言及しており、生涯を再構成することができる²³。彼も叔父がトゥールのサン・マルタン教会の宝庫係を務めた地域の有力家門に生まれ、おそらく王ロベール2世（在位 996-1031）の宮廷に奉仕したのちフリユリー修道院でアッポ（945頃-1003）の下で学んで修道士となろうとするが、叶わず1001/02年頃サン・マルタン教会の宝庫係となるよう強いられたという。トゥールやフリユリー修道院を含むネットワークにロドルフスも関与していたのかもしれない。その場合合会いはヘリヴェルスがトゥールの宝庫係になる以前のフリユリーであろう。

このように考えると、前述の蝕をめぐる知識の出所も想像できる。のちに

教皇シルヴェステル2世となるゲルベルトゥス（945頃-1003）が学知を求めてヨーロッパを遍歴したことはよく知られているが²⁴、飛躍したのは彼だけでではなかった。アッボも自らの修道院では得られない知を学ぶために遍歴学者としてパリやランス、さらにイングランドでも思索を深め、多方面で活躍したが、その一つに天文学と数学・暦法の分野がある。アッボは古典古代の作家やイシドールスやベーダ²⁵に学びつつ、暦法のみならず独自の宇宙論を展開した²⁶。ロドルフスは、稚拙ではあるが、アッボ個人あるいは彼の著作を通じて知ったのかもしれない。

彼らの関係性は知的レヴェルに留まらないと筆者は考える。ヘリヴェルスの宝庫係への任命は王ロベール2世によっているが、当時のトゥールはブロワ伯とアンジュー伯の利害が衝突する場であり、アンジュー伯フルク3世ネッラ（965/70- 1040）は996年トゥールを攻撃しサン・マルタン教会の囲壁（*claustrum*）内に侵入して破壊したという。参事会の人事をめぐって997年アンジュー伯と悶着が生じた際には、ヘリヴェルスはアッボに手紙を送り支援を求めたという。

『歴史』の中でロドルフスはフルク3世ネッラを強欲として否定的に、たとえば「（アンジュー伯フルクが建てたロシュ修道院の献堂式の）当日の9時になろうとする時、風は穏やかで空は晴れ渡っていたのが、突然南の方からのひじょうに激しい暴風がその教会を襲い、それを荒れ狂う空気で満たし、長い間強く揺り動かした。そのため、屋根組が壊れ、教会全体の梁は、教会の西面のすべてのタイルと同時に、崩れ落ち、倒壊した」（*Historiae*, II, iv, 7；pp.64-65）と描くが、これは彼らに共有された恐怖や嫌悪が反映されているのであろう。

さらに、アッボが『歴史』において描かれるのは1回に過ぎないが、上記のように考えると秘められた意味があるように思われる。「（アッボが傘下のラ・レオル修道院を巡察中）ある日、その共住修道院の中庭において事件が起こった。数人の人々が諍い、怒りの刺激が燃え上がって、ひじょうに激しい騒動が生じたのである。そのため、ひじょうに敬うべき人である前述のアッボは知らせを受け、騒動を静めるために書き板とペンを手に持って急い

だ。一人の平民が悪魔の霊（*spiritu diabolico*）に動かされて突進し、彼の脇腹を槍で刺し貫き、彼をキリストの殉教者とした。その者は、言われるところによると、まもなく悪魔（*doemone*）に憑かれ、悲惨に生涯を終えたという（*Historiae*, III, 11；pp.112-13）」と簡潔だが強い感情をこめて述べている。『歴史』においてリアルタイムで「キリストの殉教者」とみなされているのはアッポだけであり、フリユリーのアイモイヌスの『聖なる殉教者修道院長アッポ伝』と軌を一にしている。稿を改めて論じるように、彼らは世俗勢力などとの抗争に翻弄され²⁷、その思いを微妙な表現で吐露していたのであろう。

この時点では、ロドルフスは誇り高くはあるが、学問に精進し逸脱者と諍られることもない普通の修道士の道をまだ歩いていたのである。

注

- 1 Liberは卷子体ではなく冊子体であることから、本稿以降『歴史五卷』ではなく『歴史五書』とする。
- 2 たとえば「千年目の年に—ロドルフス・グラベルの『歴史五卷』にみる終末思想—」歴史学研究会編『再生する終末思想』（青木書店、2000年）317-348頁や「ロドルフス・グラベルの『歴史五卷』における教皇と皇帝」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』第33号（2001年）63-92頁など。
- 3 本稿では以下の現代語訳、Rodulfus Glaber, Neithard Bulst, John France. *Rodulfi Glabri Historiarum libri quinque = The five books of the histories*. Oxford, Clarendon Press, 1989；Rodolfo il Glabro, Guglielmo Cavallo, Giovanni Orlandi. *Cronache dell'anno mille (Storie)*. Milano, Mondadori, 1989；R. Glaber, M. Arnoux. *Histoires*. Turnhout, Brepols, 1996を適宜参照した。
- 4 以下において『歴史Historiae』と『グリエルムス伝Vita』についてはNeithard BulstとJohn Franceによる英ラ対訳版を底本として用い、文中にその頁数を示すこととする。
- 5 奉獻修道士に関する本稿の記述は、Mayke De Jong. *In Samuel's Image: Child Oblation in the Early Medieval West*. E.J. Brill, 1996による。
- 6 ヌルシアのベネディクトゥス「戒律」第59章（古田暁訳）『中世思想原典集成5』「後期ラテン教父」（平凡社、1993年）311-12頁参照。
- 7 G. Oury. “L'idéal monastique dans la vie canoniale Le Bienheureux Hervé de Tours (+ 1022)”, *Revue Mabillon*, t.52(1962), pp. 1-31は「子どもpuer」は15歳で終わるとする。
- 8 *Gesta abbatum Sancti Bertini Sithiensium*, MGH SS 13, 1881 (O. Holder Egger), p. 629.

- Cf. Mayke De Jong, p.64. Cf. Mayke De Jong, p.64.
- 9 Cf. C. Sapin, “L’ancienne abbaye Saint-Léger-de-Champeaux (Saint-Léger-Trieu, Côte-d’Or), contribution à l’étude archéologique des éléments subsistants et des fouilles récentes, 1969 - 1977”, *Mémoires de la Commission des antiquités de la Côte-d’Or*, 30 (1978), pp.237-256.
 - 10 以下の記述は、Noëlle Deflou-Leca. *Saint-Germain d’Auxerre et ses dépendances, (V^e-XIII^e siècle): un monastère dans la société du haut moyen âge*. Saint-Étienne, 2010による。
 - 11 実際、*Les gestes des abbés de Saint-Germain d’Auxerre*, eds. Noëlle Deflou-Leca and Yves Sassiez, Paris, 2011にはヘルドリクスより前の院長の事績が記されていない。
 - 12 *Les gestes des abbés de Saint-Germain d’Auxerre*, p.14.
 - 13 Cf. Paul Edward Dutton. “Raoul Glaber’s ‘De diuina quaternitate’: An Unnoticed Reading of Eriugena’s Translation of the Ambigua of Maximus the Confessor”, *Mediaeval Studies* 42 (1980), pp.431-453.
 - 14 John France, pp.242-43, n.1およびGuglielmo Cavallo & Giovanni Orlandi, p.364, n.61による。
 - 15 Cf. John France, pp.242-43, n.1.
 - 16 Joannes Scotus Eriugena. *Epistola sancti Dionysii Areopagitae Demophilo Therapeutae*, *Patrologia Latina*, 122, Col. 1187C. *Patrologia Latina The Full Text Database*による。
 - 17 John Franceは、Phosphorus (Φωσφόρος : Lucifer) の誤りだとする。Cf. p.244, n.4.
 - 18 オセール学派に関する本稿の記述は、Cf. *Saint-Germain d’Auxerre : intellectuels et artistes dans l’Europe carolingienne, IX^e-XI^e siècles*, pp.32-78. による。
 - 19 Cf. Vaast-Barthélemy Henry. *Mémoires historiques sur la ville de Seignelay, département de l’Yonne, depuis sa fondation au viiie siècle, jusqu’en 1830*. Avallon, 1833, p.146.
 - 20 Cf. Franz Brunholzl. *Histoire de la littérature latine du moyen âge*. I, 2. Brepols, 1990, pp.233-41, 316-21. だがレミギウスにはベーダの『時の数え方について *De temporum ratione*』の註解があるという。
 - 21 Cf. Franz Brunholzl. *Histoire de la littérature latine du moyen âge*. II, Brepols, pp.202-205.
 - 22 この違いは『歴史』の性格を考える際に重要だと筆者は考える。
 - 23 ヘリヴェルスについての以下の記述は、Richard Gem. “The pilgrimage church of St Martin at Tours. The building project of the treasurer Hervé (c. 1001 - 1022) and its context”, in *Romanesque saints, shrines and pilgrimage*. 2020, pp.89-107による。.
 - 24 たとえばPierre Riché. *Gerbert d’Aurillac, le pape de l’an mil*. Paris, Éditions Fayard, 1987を参照。
 - 25 ベーダをロドルフスは『歴史』冒頭で歴史家の先達として挙げているが (Historiae, I, 1 : pp.2-3)、彼は中世ではむしろ暦法と天文学の権威として知られ、復活の主日の計算に必須とされた『時の数え方について *De temporum ratione*』では天体と蝕の関係が論じられている。Cf. Bede (translated with introduction, notes and com-

mentary by Calvin B. Kendall and Faith Wallis). *On the nature of things and On times*. Liverpool University Press, 2010.

- 26 Cf. Barbara Obrist, “Abbon de Fleury: Cosmologie, comput, Philosophie”. In *Abbon, Un Abbé de l’an Mil*, eds. Gillette Labory and Annie Dufour, Brepols, 2008, p. 177–203; id., “introduction historique.” in Abbo, Alfred Lohr and Barbara Obrist. *Abbonis Floriacensis Miscellanea de computo, de astronomia et de cosmographia*. Brepols, 2019, vii-l.
- 27 Cf. Agathe Corre-Rivière. “L’action d’Abbon à La Réole et Le Monachisme Gascon.” in *Abbon, Un Abbé de l’an Mil*, pp. 81-99.

